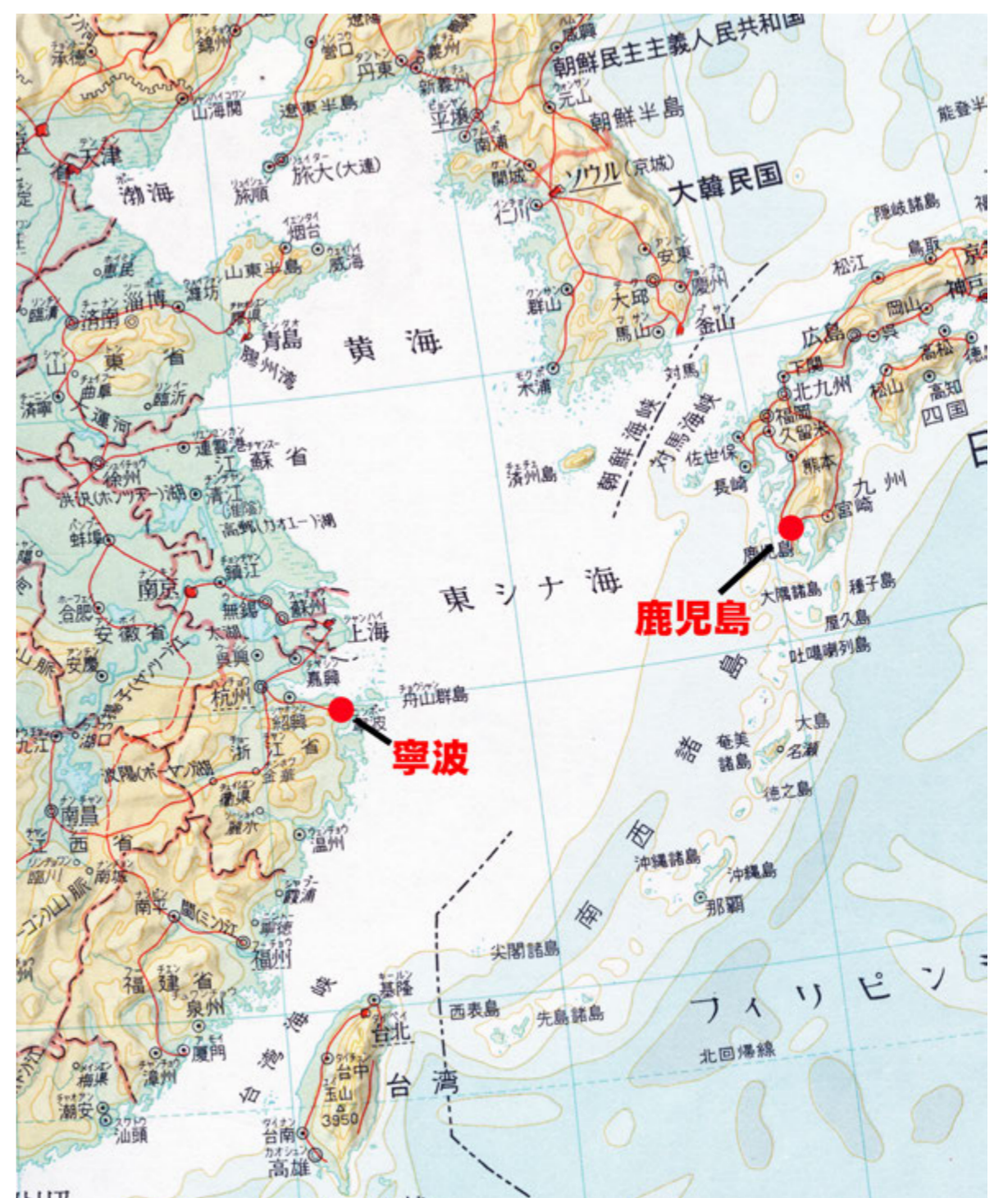


中世の成果（1）

芝原遺跡の発掘調査報告書が刊行されたことにより、^{もったいまつ}持躰松遺跡と渡畑遺跡を含めた万之瀬川下流域の交易港としての状況がはっきりしてきました。

白磁や青磁の出土数から、11世紀後半～12世紀後半の中世前期と、14世紀後半～17世紀前半の中世後期に中国貿易のピークがあったことが判明しました。国内産陶器としては、12世紀中頃～12世紀後半の畿内産瓦器^{がき}が出土しており、「平清盛」が活躍した時期に相当します。建物およびカマドや墓も多くみつかっており、倉庫や市場が発達していたこともわかります。



中世の成果（2）

志布志城跡では中国明代（1368～1644）の華^か南三彩^{なんさんさい}が出土し、志布志湾岸でも中国貿易が行われていたことを示します。

外畠遺跡では、12世紀後半～13世紀中頃と14世紀後半～15世紀代の集落が報告されています。また、山口遺跡では、13世紀後半～14世紀前半の掘立柱建物跡30棟や墓4基などがみつかかり、当時の集落景観が復元されつつあります。

